

# 薬草園の花だより

第23号

2020年(令和2年)6月21日発行

### ■第23号に寄せて

新型コロナウイルスの影響はまだ続いておりますものの、6月19日には、ようやく県をまたぐ移動の制限も解除となり、その第一段についてはだいぶおちついてきたようです。しかし、このあと(無いに越したことはないのですが)第二段以降の流行が危惧されており、注意を怠ることは当面できない状況となっています。



ユリの花束 (教授室にて)

学生さんにとっても教職員の皆様にとっても慣れない日常生活となり、ストレスも溜まる日々ですが、このような時に私たちの生活を潤してくれる花の存在はありがたいものです。過日、地域連携事業の「伊奈町スマイルプロジェクト」により、生花を購入させていただきました。ユリの花束を購入しましたが、「こんな見事なものをこの値段でよろしいの?」と思うほどのもの。香りとともに大いに楽しませていただきました。

薬用植物園では薬草・毒草を主に栽培展示していますが、「これも薬草なの?」と思われるものもあります。その目的は、「現在は薬草となっていない植物にも何らかの薬用に供することの出来るところを見出すことも薬学徒の務め」と思っているからです。あるいは、単に美しい花をみるだけでも心が穏やかになり、安らぎを与えてくれるかもしれません。とすれば、その植物は間違いなく「心の薬」となっているわけです。

ユリはその鱗茎(球根)を百合(びゃくごう)と称し、歴とした薬草で、 消炎、鎮咳、鎮静などを目的とする漢方薬にも配合されます。また、鱗茎は 百合根として食用にもなります。薬草園ではまもなくオニユリや黄色いオウ ゴンオニユリが咲きそうですし、そのあと、ヤマユリなどが続きます。

日本はまさにユリの国であり、ヤマユリやササユリ、ヒメサユリ、スカシュリ、タメトモユリ、テッポウユリ、カノコユリなど多数の自生種があります。カノコユリはかのシーボルトが幕末にヨーロッパに紹介し、当地で大ブ

ームを引き起こし、カノコユリは当時のわが国の重要な輸出品となったほどでした。カノコユリには白花のものもあり、 このものとヤマユリやタメトモユリとの交配によって作出されたといわれるのが一世を風靡したカサブランカです。カサ ブランカと似た交配によりル・レーブというピンク色の品種も作出されました。いずれも栽培しやすいユリです。

ユリには神聖な雰囲気のあることからキリスト教の祭事や、わが国でも奈良県の三枝(さえぐさ)祭りなどではそれぞれ、テッポウユリやササユリの花が重要な役割を果たしています。なお、キリスト教の祭事にはかつては白い花をつけるリーガルリリーが使われていましたが、わが国からテッポウユリが伝わってからはその役割がとって変わられました。

ユリについてはまだまだ書きたいことがたくさんありますが、それは別の機会に譲ることとして、わが国がユリの国であることを誇りに思うとともに、この薬草も大いに慈しみ、楽しみましょう。(日本薬科大学薬用植物園長/船山信次)

## ■今咲いています・見頃です

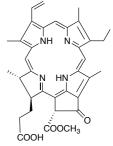
今まさに植物にとっては一年で最も勢いのある時期です。ということはいわゆる雑草と呼ばれるものの除草が大変な時期でもあります。雑草とは目的として栽培している植物以外の植物です。よって、一般に雑草として嫌われているドクダミを薬草として栽培している圃場に紛れ込んだチューリップは雑草となるわけです。

#### 《ドクダミ》

ドクダミ科のドクダミ (Houttuynia cordata) は庭中に縦横に根を張り、種子を飛ばし



ては芽を出して繁茂するため、園芸家からは嫌われものですが、その花をよく見ると結構きれいなものです。ただし、花弁と見紛うものは苞であり、花そのものは淡緑黄色の小花で目立ちません。ドクダミとは「毒を矯める」ためにこの名前がついたと言われます。ドクダミの生薬名は十薬(じゅうやく)であり、漢方用薬としてもわが国の民間薬としても使われる珍しい例です。利尿作用などを期待して服用されますが、



フェオフォルバイド a

実際に利尿作用のあるクェルシトリンなどのフラボノイドが含まれています。なお、美肌作用を期待してドクダミ茶を服 用してかえって肌荒れを起こす方がいますが、その原因としては、この植物にフェオフォルバイド a (pheophorbide a) という成分を含むことも一因として考えられます。その場合には一度ドクダミ茶の服用を止めてみてはいかがでしょうか。

#### 《クララ》

クララ (Sophora flavescens) は、わが国の日当たりの良い山地に自生するマメ科の多年草です。クララとは何とも バタくさい名前ですが、実は歴とした日本語由来の名前です。この植物の全草はとても苦く、なめるとくらくらと目眩(め



苦辣(くらつ)由来であるという説もあります。クララの全草が民間で回虫の駆除や胃腸 薬、家畜の皮膚病に応用されたことがあります。一方、根の乾燥品の生薬 名を苦参(くじん)といいます。大量に服用すると脈拍や呼吸が速くなり、 重症になると呼吸が麻痺するといわれます。家畜が大量のクララを食べる ことによって中毒事故が起きたことがあります。



苦味主成分はマトリン (matrine) で、その名前はクララの別名 (古名)

のマトリグサ由来です。マトリンの研究はわが国で行われ、その単離、化 学構造研究を経て、全合成が完成して立体化学が確定するまで約100年

クララ

かかっています。ちなみにケシ(阿片)からのモルヒネ単離が1805年に報告されてか らわが国で全合成が完成されるまでには約150年かかりました。先達の努力に脱帽です。

まい)を起こすほどなので、眩草(くららぐさ)からクララと名付けられたとか。また、

## ■最近の他の植物写真から

#### 《モウソウチク・ウラルカンゾウ・オニゲシ・スイレン・ヒャクニチソウ》

学内のあちこちでモウソウチクの筍をたくさん見ました。 モウソウチクがわが国に入ったのは18世紀(江戸時代)の



ことです。一方、竹弓の材料 などに使われるマダケは8 世紀には存在していたとか。 よって、奈良時代を舞台とす る『竹取物語』に現れる竹は マダケと考えられます。

嬉しいことに薬草園では、 昨年に引き続いてウラルカ

ンゾウが花を着けました。昨年(第17号)も書



オニゲシ

きましたが、ウラルカン

ゾウがわが国で開花す

モウソウチク(とその若竹)

ウラルカンゾウ



スイレン



ヒャクニチソウ

るのは極めて稀なこととか。展示圃場にては他に、オニゲシが 開花中です。時々、歴とした専門書でも間違えてオニゲシが麻 薬ゲシであると紹介されていることがありますが、オニゲシは 麻薬成分を含まず、普通に栽培可能なケシです。麻薬ゲシの茎 葉はつるんとした感じで、葉が茎を巻いていますが、オニゲシ の茎葉は毛深く、葉は茎を巻いていません。一方、水生植物展 示園ではスイレンが花を着けています。ここでは今、別途、ハ スが大きな葉を出し始めています。なお、薬用植物園の展示植 物を支えるにはバックヤードの働きも大切ですが、今はヒャク ニチソウを播種したものの苗が定植適期を迎えています。

## ■薬用植物園からのお知らせ

#### 《様々な薬用植物が元気に皆さんの帰りを待っています》

まだ、学生さんたちの大学構内への自由な入構は制限されている状況ですから、残念ながら、今のところ、薬用植物園 内の植物の直接の観察は出来ませんが、植物の手入れはずっと変わらずに続けられています。皆さんがまたキャンパスに 戻ってこられるようになったときにはいつでも是非観察にいらしてください。お待ちしています。

発行:日本薬科大学薬用植物園